様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１２４２２

研究課題名（和文）外交における日本語教育：ソフトパワー戦略、ディアスポラ戦略と教師の主体性

研究課題名（英文）Japanese language education in foreign policy: Language teacher subjectivities and/in the soft-power diplomacy and diaspora strategies

研究代表者
本林　響子（Motobayashi, Kyoko）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：４０７７２６６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、外交における日本語教育に着目し、日本語教育が日本の日系人政策および文化外交の中にどのように位置付けられているかについて検討したものである。本研究においては、政策文書の分析だけではなくインタビュー及びエスノグラフィーデータの収集と分析も行い、関連プログラム参加者の参加前のライフヒストリー、事前研修中のやりとり、および参加後の展望に関する聞き取りを行い、個人と政策との関係性、すなわち個人の自発的な行動が政策の一部を為していく過程や政策が個人に及ぼす実際の影響について考察することを目的とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
外交における日本語教育政策研究においては、主にソフトパワー戦略の観点から海外日本語振興政策について一定の知見が積み上げられてきたが、移民送出国家による自国出身海外在住者及びその子孫の活用戦略であるディアスポラ戦略的な側面はあまり検討されていない。本研究では、複数の日本語教育施策の分析を通して言語政策におけるディアスポラ戦略とソフトパワー戦略との相互補完性の検討を試みたこと、また、外交政策の中に位置付けられるプログラムの参加者へのインタビューデータ及び研修のエスノグラフィーデータの分析を深化させ、個人と政策との関係性を考察しようとした点に意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study examines the ways in which Japanese language education is situated within Japan’s foreign policy, especially Japan’s diplomatic activities and policies for Japanese descendants overseas, as well as broader cultural diplomacy. In addition to analyzing policy documents, this study also collected and analyzed interview and ethnographic data. Interviews were conducted with the participants of related programs about their life trajectories before participating as well as their perspectives for future; and their interactions during pre-departure training sessions were observed. The analysis of these interview and ethnographic data were combined with the analysis of policy documents, with the aim of examining the relationship between individuals and policies, in particular, the process in which the voluntary actions of individuals become part of policies and the actual impact that policies can have on individuals.

研究分野：社会言語学、言語人類学

キーワード：外交における日本語教育　言語政策

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、移民送出国家による自国出身海外在住者及びその子孫の活用戦略である「ディアスポラ戦略」という概念を援用し、日本政府による海外日系人への継承日本語教育支援政策を分析した研究（Motobayashi 2015, 2016）を発展させようとしたものである。外交における日本語教育政策研究においては、主にソフトパワー戦略の観点から海外日本語振興政策について一定の知見が積み上げられてきたが、ディアスポラ戦略的側面はあまり検討されていない。本研究では、複数の日本語教育施策の分析を通し、言語政策におけるディアスポラ戦略とソフトパワー戦略との相互補完性を検討すること、また、外交政策の中に位置付けられる教師派遣プログラム参加者へのインタビューデータ及び派遣前研修のエスノグラフィーデータの分析を深化させ、個人と政策との関係性を考察することを目的とした。

２．研究の目的

本研究の課題１（ディアスポラ戦略とソフトパワー戦略との比較検討）では、日本語教育が日系人政策および文化外交の中にどのように位置付けられているかについて検討し、ソフトパワー戦略的な日本語教育と、ディアスポラ戦略的な継承日本語教育との相違点、共通点および相補性について検討した。課題２（ディアスポラ戦略に関わる個人の通時的分析）では、インタビュー及びエスノグラフィーデータの分析を通じ、当該プログラム参加者の参加前、参加中、参加後の個人の軌跡と研修中の相互行為とを丁寧に掘り下げ、個人の自発的な行動が政策の一部を為していく過程及び政策が個人に及ぼす実際の影響の一端を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究は、文書分析、インタビュー、エスノグラフィーデータの質的分析を組み合わせた研究である。課題１においては政策文書の分析と理論研究を中心とした。課題２については、インタビューやエスノグラフィーによって得られた質的データの分析及び関連する政策文書の分析と同時に、応用言語学及び社会言語学領域で生まれた様々な概念の整理や他領域での概念との統合可能性に関する理論研究も行っている。

４．研究成果

(1) 中心的な成果・出版物

本研究による成果は主に令和 4[2022], 令和 5[2023], 令和 6[2024]年の出版物において発表されている。令和 4[2022]年度には、本研究で得られた成果の一部が書籍（分担執筆）として刊行された（Motobayashi 2022）。これは、外交政策の中に埋め込まれた言語政策としての「南米日系人コミュニティへの（継承）日本語教育教師派遣」プログラムを取り上げ、「日系人」の「継承語」がこの文脈においてどのように概念化されているかを分析するとともに、それが政策遂行上どのような意味を持つかという点を検討したものである。特に日本側の事前研修において繰り返し現れる「日系人の（言語文化）継承への熱意や要望」（本文中では“heritage desire”）というテーマに着目し、「継承語」概念と「ルーツ」や「情緒（『思い』）」を結びつける言説と実践の

交錯を描き出すとともに、「日系人の（言語文化）継承への熱意や要望」が、当該プログラムを取り巻くマクロ・メゾ・ミクロレベルの複数のアクターによって重層的に、かつ互いに少しの「ずれ」もはらみながら、表象されている様相（“layered politics of representation”）を捉えようとしたものでもある。方法論の観点からは、本研究は政策文書と研修講義内容、及び、研修中に「本筋からの逸脱」として言及されていた会話の３つに現れたものを比較検討することを通して上記を表現しようとしたものである。政策文書の検討とエスノグラフィーデータの分析を比較統合し、言語文化に関する思想や表象が言語政策の理念と実践の中で随所に見出されることを指摘しつつ、それらが重層的に重なり合って言語政策の一端を形づくる様相を描き出すという手法は、1980 年代～1990 年代の社会言語学や言説分析の動向を反映する形で 2000 年代ごろから言語政策研究においても主要な方法論の一つと位置付けられており（Johnson 2023）、本研究はそのような方法論的潮流に貢献しようとしたものでもある。

令和 5[2023]年度には、書籍（分担執筆）1 件が刊行され、もう 1 件が印刷中（2024 年刊行予定）となった。前者は移動研究の知見、とりわけ中間層的移動者（middling transnationals）に関する研究結果を援用し、移動研究と応用言語学双方の知見を参照しつつ、言語教師として国際移動を行う個人の業務と余暇の統合的形成過程を解釈するものであり、2023 年 12 月に刊行された（Motobayashi 2023）。「労働／余暇」「日常／非日常」等の境界が揺らぐなかで、国際移動において経済的持続性と経験的充足感を統合的・融合的に志向する個人の軌跡を丹念に追うという研究は、移動研究等の領域においては既に一定の蓄積がなされている。本研究では、このような動向を踏まえた上で、国際移動を志向し実践する個人の軌跡の中で個別の言語概念・言語思想や言語の価値づけがどのように作用していたかを描き出そうとした点において、学際的視点からの貢献を模索したものであったと言える。また、当該書籍は「ボランティア・ツーリズム（voluntourism）と言語教育・言語学習」に特化した書籍であるが、本研究で扱った事例が概念的にボランティア・ツーリズムとワーキング・ツーリズムの間に位置付けられるとも言える形態のプログラムであることから、本書の担当章においては中間層的移動者の実践としての「ワーキング・ツーリズム」の概念にも言及しながら、未だ多様な解釈が併存する「ボランティア・ツーリズム」の定義の整理と再検討を試みるという側面もあった。

現在印刷中（2024 年刊行予定）の書籍分担執筆については、批判的社会言語学（critical sociolinguistics）の観点から国家と言語の関係性を論じた共同執筆であり、本研究の研究成果をより抽象的な形で組み入れ、当該分野の発展に貢献しようとするものである（Del Percio, Motobayashi, He, Tay & Tebaldi forthcoming 2024）。なお、令和 5[2023]年度中、本研究課題の関連領域である応用言語学における社会論的転回に関する招待講演を行った。当該講演も本研究の成果を間接的に反映したものであるといえる（本林 2024）。

(2) 文献研究、理論研究と今後の課題

上記データの分析と並行して、本研究課題の初年度である平成 30[2018]年度より、課題１に関連する理論的枠組みと先行研究の整理にも注力して研究を進め、ソフトパワー戦略、ディアスポラ戦略に関する文献を収集、整理するという作業を継続してきた。これは学会発表では言及してきたが、論文としては現在準備中であり、今後も継続していきたいと考えている。

また、課題２から派生した形で、平成 30[2018]年度より、個人が言語の経済性をどのように捉え、どのような行為でそれを最大化させようとしているかを捉えるために有用と考えられる「投資としての言語学習」「消費としての言語学習」「言語の商品化」の概念を再検討し、言語の経済

性に関して応用言語学において提唱されてきた様々な理論や概念の整理を試みている。これは上述の移動研究の知見、とりわけ中間層的移動者（middling transnationals）に関する研究結果との相互参照により理論的な貢献が見込まれるものであり、令和 5[2023]年度刊行の書籍分担執筆にも関わりの深いテーマであるが、当該書籍の担当章執筆においては書籍全体のテーマであるボランティア・ツーリズムの議論に貢献することを優先したため、学際的な理論的統合の可能性に関しては学会での発表にとどまっている（Motobayashi 2018, 2020, 2021）。今後、論文として発表していく予定である。

全体として、今後も本研究で得られた視点をさらに発展させ、必要に応じてデータの解釈を進めるとともに、理論面での検討を行い、研究発表および論文投稿を行いたいと考えている。特に、上記４(1)の出版物はいずれも関心を同じくする海外研究者と共同での刊行であったことから、そこで得られたネットワークを活かし、今後も同分野の動向を注視しつつ、研究を継続していく予定である。

引用文献

Del Percio, A., Motobayashi, K., He, S., Tay, J., & Tebaldi, C. (forthcoming 2024). Language, power and the state. In Del Percio, A. & Flubacher, M. (eds.), *Critical sociolinguistics: Dialogues, dissonances, developments*. Bloomsbury Publishing.

Johnson, D. C. (2023). Critical empirical approaches in language policy and planning. In M. Gazzola, F. Gobbo, D. C. Johnson, & J. A. Leoni de León (eds.), *Epistemological and theoretical foundations in language policy and planning* (pp. 15-40). Palgrave Macmillan.

Motobayashi, K. (2015). *Language teaching as foreign policy: Japanese language teachers in Japan's international cooperation volunteer program*. Doctoral dissertation, University of Toronto.

Motobayashi, K. (2016). Language teacher subjectivities in Japan's diaspora strategies: Teaching my language as someone's heritage language. *Multilingua, 35*(4), 441-468.

Motobayashi, K. (2018). Working for free?: Economic ir/rationality of teaching Japanese overseas as a volunteer. *Paper presented in a panel 'Ir/rationality in language investment: An alternative sociolinguistic critique of neoliberalism' organized by Inchull Jang, Sociolinguistics Symposium 22, University of Auckland, Auckland, New Zealand, 27 June 2018*.

Motobayashi, K. (2020). Mobility, identity, and the social turn in applied linguistics. *Invited lecture at the ESRC-JSLARF Symposium (online), 3 October 2020*.

Motobayashi, K. (2021). Unsettling capital in 'investment' and 'consumption'. *Paper presented in a panel "Unsettling Capital and Language" organized by Will Simpson and John O'Regan, Sociolinguistic Symposium 23, The University of Hong Kong (Online), 9 June 2021*.

Motobayashi, K. (2022). Discursive construction of heritage desire: Nikkei identity discourse in a layered politics of representation. In M. Mielick, R. Kubota, & L. Lawrence (eds.), *Discourses of identity: Language learning, teaching, and reclamation perspectives in Japan* (pp. 239-259). Palgrave Macmillan.

Motobayashi, K. (2023). The off-duty expectations of international volunteer language teachers: A middling transnational perspective. In L. S. Schedel & C. Jakubiak (eds.), *Voluntourism and language learning/teaching: Critical perspectives* (pp. 135-159). Palgrave Macmillan.

本林響子（2024）　「応用言語学における『社会論的転回』の 30 年：理論的展開と内的多

様性」　JSLARF Winter Symposium　**講演**　（2024. 3.2　**於**　**信州大学**）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　4件／うち国際学会　8件）

１．発表者名 Motobayashi, Kyoko
２．発表標題 Work-leisure configuration of middling transnationals: Off-duty expectations of the volunteer Japanese language teachers.
３．学会等名 Anthropology of Japan in Japan Annual Meeting
４．発表年 2022年

１．発表者名 Motobayashi, Kyoko
２．発表標題 Sociolinguistic trajectories of language teachers: Contexts, discourses, and transformation
３．学会等名 Invited lecture at SLAAT talk series, Lancaster University, UK (26 May 2021 [Online])（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Motobayashi, Kyoko
２．発表標題 Language and diaspora politics of the Japanese state: At the nexus of international cooperation and emigration policies
３．学会等名 Paper presented in a panel “Migration and Language”. International Political Science Association World Congress (11 July 2021 [Online])（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Motobayashi, Kyoko
２．発表標題 Unsettling capital in ‘investment’ and ‘consumption’
３．学会等名 Paper to be presented in a panel “Unsettling Capital and Language” organized by Will Simpson and John O’Regan. Sociolinguistic Symposium 23 (9 June 2021, The University of Hong Kong [Online])（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Motobayashi, Kyoko
２．発表標題 Mobility, identity, and the social turn in applied linguistics.
３．学会等名 ESRC-JSLARF Symposium, October 3rd, 2020.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Motobayashi, Kyoko
２．発表標題 Teaching abroad and access to local languages: Foreign language learning as language teacher volunteers' expectation for off-duty life.
３．学会等名 Georgetown University Round Table (GURT 2020 Virtual)（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 本林響子
２．発表標題 日本人の海外移住と日本語教育支援政策
３．学会等名 第21回国際日本学シンポジウム　「グローバル・ヒストリーと国際日本学」
４．発表年 2019年

１．発表者名 Motobayashi, Kyoko
２．発表標題 Social turn in applied linguistics: From the perspective of Japanese applied linguistics.
３．学会等名 Lecture at MSc in Applied Linguistics for Language Teaching, Department of Education, University of Oxford（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Motobayashi, Kyoko
２．発表標題 Working for free? Economic ir/rationality of teaching Japanese overseas as a volunteer.
３．学会等名 Sociolinguistics Symposium 22（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Motobayashi, Kyoko
２．発表標題 Post-national existence for the state’s presence: Language, Japanese Diaspora and Japan’s ODA.
３．学会等名 Association for Asian Studies Annual Conference 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Motobayashi, Kyoko
２．発表標題 Cosmopolitan language ideology in a state language initiative: Language and population representation in the Japan Foundation’s international promotion of the Japanese language
３．学会等名 Anthropology of Japan in Japan（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 本林響子
２．発表標題 応用言語学における「社会論的転回」の30年：理論的展開と内的多様性
３．学会等名 JSLARF Winter Symposium（招待講演）
４．発表年 2024年

〔図書〕　計3件

1．著者名 Mielick, M. Kubota, R., & Lawrence, L. (eds.)	4．発行年 2022年
2．出版社 Palgrave Macmillan	5．総ページ数 382
3．書名 Discourses of Identity: Language Learning, Teaching, and Reclamation Perspectives in Japan	

1．著者名 Schedel, L. S. & Jakubiak, C. (eds.)	4．発行年 2023年
2．出版社 Palgrave Macmillan	5．総ページ数 300
3．書名 Voluntourism and language learning/teaching: Critical perspectives	

1．著者名 Del Percio, A. & Flubacher, M. (eds.)	4．発行年 2024年
2．出版社 Bloomsbury Publishing	5．総ページ数 400
3．書名 Critical sociolinguistics: Dialogues, dissonances, developments	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関

米国	Grinnell College	Hunter College		
ドイツ	University of Bonn			
英国	University College London			
中国	Yangzhou University			
ルクセンブルク	University of Luxembourg			